

想起あるいは不図

村山紀明

かりに、「偶然を考えることは、人間の想像力に依存している¹⁾」、とするならば、過去の想起、あるいは未来をも指向する「不図²⁾」という心の動きとの関連を考えてもよいのではないだろうか。

九鬼周造の『偶然性の問題』にかんする論考が続いて刊行されている。これは、研究者の九鬼哲学への関心によることはもちろんであろうが、「偶然」論が現代的意義をはらんでいることも示す。

九鬼のそれは、西洋哲学の伝統に依拠してはいるが、とりわけ日本文学との関連も考慮せざるを得ず、またそれによって独自性も浮かびあがってくるように思われる。

小論では、最初に夏目漱石の作品にふれ、さらにフランス文学・哲学にあらわれる偶然性の問題をひとつふたつとりあげ九鬼のそれと比較してみよう。さらには、偶然論を論じるにあたって、因果関係という点で時間とのかかわりも、論の射程に入ってくるだろう。もちろん、時間論には一切ふれ得ない。

また、九鬼の生きた時代の思想・文学的背景も考慮に入れなければならないだろう。

九鬼によれば、偶然は、けっして人間を翻弄する類の負の価値をもつものではなく、それに積極的な意義を見いだしている。かれは、偶然性を否定したニコライ・ハルトマンの考えを批判している。

偶然性を生かすという点で、人間同士の邂逅にかれが着目したのはけだし当然のことといえよう。

漱石の『明暗』にかんして、池田は「この小説では、主人公が他の人物たちと衝突し、彼らを動かしていくのではなくて、偶然彼らと出会い、つき動かされていく。その意味で、『明暗』は人格の能動性に基盤をおいていないともいえる³⁾」とのべている。

また、「『白いベッドの上に横へられた無残な自分の姿』とは、自分の意志によってものごとを決定しているように見えながらじつは、(偶然)性にもてあそばされる主人公の象徴なのかもしれない⁴⁾」というように、池田は津田の能動的な意志を認めてはいない。

いうならば、『明暗』においては、筋の発展は、津田が遭遇する偶然の出来事に左右されているということである。もちろん、作家の手によってそのようなプロットがとられたということはいうまでもないことであるが。ただ、ここで注目すべきは、作家・漱石は、人間関係における偶然性に重要性を付与していることだ。

「それも己が貰はうと思ったからこそ結婚が成立したに違いない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思ってゐなかつたのに。偶然？ポアンカレーの所謂複雑の極致？何だか解らない。

池田は、『明暗』では、はじめから(因果)の秩序が排除されているとする。さらに、「どう変わるかわからない偶然性の世界に登場人物たちは置かれている」と、いう。たしかに、この小説に

あらわれている現象・事件はそうである。

それでは、このような世界は小説のなかのみにあらわれる特殊なものなのだろうか。それとも、現実世界とはもともと偶然による出来事の集合なのだろうか。

ここで、九鬼の偶然性にかんする論考を一瞥してみたい。かれ自身、偶然性の問題を論究するにあたって漱石の作品をとりあげている。かれは、『行人』のつぎの箇所を引用している。

「私が此手紙を書き始めた時、兄さんはぐうぐう寐てゐます。私は偶然兄さんの寐てゐる時に書き出して、偶然兄さんの寐てゐる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠りから永久覺めなかつたら嘸幸福だらうといふ氣も何處かでします。⁶⁾」

ここで九鬼はつぎのように述べている。

「此偶然とは『行人』の主人公と永眠との間に價值の上から見て交叉点を示してゐる。其交叉点が偶然と考へられたので、さうしてそれが偶然である故に『妙に考へます』と云つて居るのである。⁷⁾」

九鬼は一郎の仮眠と永眠との間に偶然の要素を見いだしている。「價值の上から見て」とはいかなることだろうか。「交叉点」ということばから考えると、生（水平面）と死（垂直面）との交わるところという意味だろうか。

「永久覺めなかつたら嘸幸福だらう」という記述からすると、必ずしも死を否定的にとらえてはいない面があり、また「永久覺めなかつたら嘸悲しいだらう」をとりあげると死イコール悲嘆という逆の図式ができるだろう。

漱石のここで使われている「偶然」は、一郎の仮眠の時と、Hさんの手紙を書くという行為に交叉点があるように読めるのだが、九鬼は、仮眠と永眠との二項のいずれかが成立することによって一郎が幸せにあるいは不幸になるという交叉点をもみているようだ。さらに、そこに一種の驚異があるとす。九鬼は「偶然性の驚異は邂逅、めぐりあひの驚異である」としている。

ところで、九鬼の偶然性にかんする論の出発点はいかなるものだろうか。

「『偶然』とは必然性の否定である。必然とは必ず然か有ることを意味してゐる。すなはち、存在が偶々然か有るの意で、存在が自己のうちに十分の根拠を有つてゐないことである。すなはち、否定を含んだ存在、無いことの出来る存在である。⁸⁾」

また、つぎのようにも述べている。

「偶然が成立するためには可能が可能のまままで実現される、必然に移らないで可能のまままで実現される、といった風のことがなくてはならないのであります。⁹⁾」

ある意味では、小説に描かれる世界は、「可能のまままで実現される」ひとつの実験例ではないだろうか。

日本の近代文学における自然主義、あるいは私小説の系譜は、納得しうる因果関係、もしくは作家の実体験に裏打ちされた自然らしさ、本当らしさを忠実に描いてきたものではなかつたらうか。私小説は、日本人の自然主義的な生き方を反映し、小説イコール人生という思考様式から、小説が作家の実生活を左右してしまうというある種の因果関係に支配されてしまうことになる。

谷崎潤一郎と芥川龍之介の「小説の筋」論争も、偶然性を導きの糸とするか否かという立場の相違に端を発する論争ともいえるのではないか。

谷崎の「話のある小説」に与する姿勢は、九鬼の「偶然」に伴う感情が「驚異」であるとする見方にその根拠をもちうるものではないか。「必然」は因果関係を辿ることができるがゆえにそこ

に「平穩」という感情を伴うものに対し、「偶然」は思いがけなさという点で「驚異」を惹起するのである。谷崎のとりわけ初期の作品の魅力のひとつは、さまざまな驚異（奇抜な話）が描かれていることにあるといっても言いすぎではないだろう。

また、谷崎の作品では、プロットのうえから、九鬼流に言うと、普通の因果関係を辿らない事件が生起する。

他方、『明暗』においては、人間関係における予期せざる遭遇という点から偶然性という問題が浮上してくる。人と人との偶然的出会い、換言するならば対他関係の偶然性をめぐって『明暗』は成り立っているという側面がある。

これは、九鬼の『いきの構造』にあらわれる「いき」とはなにかという問題にもつながってくる。

ここで九鬼の『いきの構造』にふれておこう。

九鬼は、「いき」が客観的表現のなかで、どのように現れているのかを吟味し、その構造と具体例を出して検討している。

たとえば男女関係において。

「髪[・]の形を崩すところに異性へ向かって動く二元的『媚態』が表れてくる。¹⁰⁾」（強調筆者）

これは、偶然性という問題の根底にある人と人との「邂逅」というモチーフをめぐってのひとつの指摘といえよう。

「偶然性」は九鬼の畢生の研究テーマであり、ただに学問上の問題であるのみならず、かれの生き方の根幹をなすものであったことはいうまでもない。さらに、個人間の邂逅という圏内にとどまらず、異文化との接触という観点からも考察の対象となるものでもあろう。

八年間のドイツ、フランス留学を通して、日本文化の独自性の探究にむかったのは、このような九鬼の志向を考えてみるならば、当然のなりゆきともいえよう。

ここで、かれのポンティニーでの講演「東洋における時間の観念と時間の反復」と「日本の芸術における（無限）の表現」を一瞥しておこう。ここでは、文化的他者との出会い、東洋と西洋の遭遇がモチーフとなっている。とりわけ、注目したいのは後者の講演で、「偶然の問題と循環する時の問題」をとりあげていることである。かれは、蟬丸の短歌をとりあげつぎのように述べている。

「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」

これは九世紀のすぐれた盲目の歌人蟬丸の短歌である。ここにも『失われた時』と、『見出された時』の例がある。逢坂の関、それは『その名が正面破風にあって（瞬間）と呼ばれる』『二つの顔をもつ門』である。それは過去と未来の二つの道が出会う瞬間であり、無限の充実の現在の時であり、[...] それは私が蟬丸の詩句について諸君に語り、我々が、かつてすでにこの同じ時を過ごしたことがあったかどうか、そして再びこの時を共に過ごしたことがあったかどうか、そして再びこの時を共に過ごそうとしているのではないかどうか、—我々はすでに無限回知り合っていたのではないかどうか、そして再び知りあおうとしているのではないかどうかをまさしく自問している時である。¹¹⁾

これは、ニーチェのツァラトゥストラが「自己の考えとその背後の思想を怖れて、つねに低い声で」小人と語った永遠の時—永劫回帰の時でもある。また、『行人』における一郎の仮眠の場面のHさんの思いでもないだろうか。

さらに芭蕉の「橘やいつの野中のほととぎす」を引用して、九鬼は「芭蕉は橘の花の音を嗅ぐ。

野原でほととぎすが鳴くのを聞きながら、かつて同じ花の同じ香を嗅いだことのあるのを想起している¹²⁾と述べている。

この想起という現象は偶然によっているのだということを、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の一節を引用して、そこに日本と西洋の同一の想起現象を九鬼は指摘している。ブルーストの一節はこうである。

「かつて既に聞いたことのある一つの音、また嗅いだことのある一つの香が、現実でないのに実在的、抽象的でないのに観念的なものとして現在と過去の内に同時によみがえるとき、たちまち、平常では事物の内に隠されている永遠の本質が解放され、時には長く死んでいたように思われながら実は死んでいなかった我々の真の自己が目覚め、もたらされた天上の糧を受けて生き生きとなる。時間の秩序から解放された人間を、我々の内に再創造したのである。¹³⁾」

九鬼は、「時間の観念と東洋における時間の反復」で「もし『東洋的時間』について語る権利があるとすれば、何よりも回帰的時間が重要である¹⁴⁾」としている。さらに、「時間は意志に属するものである¹⁵⁾」とも述べている。この回帰的時間にかんしては、「垂直的のエクスタシスが存することができる¹⁶⁾」とし、その特徴をあげるならば、それは「契機間に非連続性が存している」、「脱自の各契機は絶対的同質性をもち」、その意味において時間は可逆的である。

九鬼は結論として「水平面は現象学的存在学的脱自を表わし、垂直面は、神秘說的形而上学的脱自を表わしている。水平面は現実面で、垂直面は仮想面であるが、この二面の交わりが時間の特有の構造にほかならない¹⁷⁾」としている。

この「垂直的のエクスタシス」とは、フランスの科学哲学者ガストン・バシュラールの垂直的時間・詩的瞬間に非常に接近した考え方だといえよう。バシュラールはつぎのように言っている。

「ポエジーがみずからの特別な力を発見するのは、不動化された瞬間による垂直的時間の中においてである。そこには、純粋なポエジーの純粋な活力が存在するが、形式と人格の中で、垂直に発展するところのものがすなわちこれである。¹⁸⁾」

及川はこれにふれてつぎのように言う。

「時間の意識は瞬間にしかはたらず、その意識は反省的ではない、あるいは瞬間の意識を意識する意識ではないと考えるべきなのであろう。[...]この瞬間の不動性は、緊張し、力のみなきった点の充実性なのであり、他の一切から切り離された高度の燃焼をおこなう瞬間だともいえよう。¹⁹⁾」

バシュラール自身の言葉を使うならば、われわれは「時間の粉末化 (pulvérisation)」に直面することに気付くのだ。われわれが純粋な変化について熟考するならば、「連続は単なる仮説」であって、「非連続の持続」という概念が必要であるのだと。

ところで、九鬼のいう「垂直的エクスタシス」は、ブルーストの特権的瞬間のひとつとして描かれている「ケルト人の魂の解放」という挿話にもみいだされる。

「私はあのケルト人の信仰を非常にもっともだと思う。それはわれわれの死別したひとびとの魂が、何か下等な存在、獣だとか、植物だとか、無生物だとかのなかに囚われていて、われわれがふとそんな木のそばを通りかかったり、そうした魂の閉じこめられている物を手に入れたりする日、それはけっして多くの人には訪れないのだが、そんな日が来るまでは完全に失われている。ところがそんな日にめぐりあうと魂はふるえ、われわれを呼ぶ。そしてわれわれがその声を聞き分けると、呪縛はたちまち解かれる。こうして解放された魂は死を征服し、われわれと一緒にふたたび生きるというのである。²⁰⁾」

ブルーストによれば、この魂の解放はすべて偶然にかかっているとされる。そこから、われわれの精神生活に踏みこみ、「われわれの過去もまた、このとおりである。過去の喚起は、強いてこれを求めようとするも徒勞であり、理知のあらゆる努力も無益である。過去は理知の領域のそと、その力のとどかぬところで、何か思いもかけぬ物質的な対象のなかに（その物質的な対象の与えてくれる感覚のなかに）隠されている。そして、そうした対象に、われわれが生前に出会うか出会わないかは、偶然によるのである。²¹⁾」

心と心のコミュニケーションが偶然に成立することがあるのだ。われわれの死も偶然におそってくる。ならば、偶然のもたらす恩恵を人はいつまでも待つことはできないということになる。

マドレーヌ菓子の挿話においても偶然によって歓喜がもたらされる。

「と、突然、追憶が浮び上った。」（強調筆者）

「しかし古い過去から、人間の死後、事物の破壊後、何一つ残るものがなくなるときも、ただ匂いと味だけは、もっともごくか弱くはあるが、それだけ根強く、非物質的に、執拗に、忠実に、なお長い間かわることなく、魂のように残っていて、あの追憶の膨大な建築を、他のすべてのものの廃墟のうえに、喚起し、期待し、希望し、匂いと味の極微のしずくのうえに、しっかりと支えるのだ。²²⁾」

九鬼は「私は秋になってしめやかな日に庭の木犀の匂を書斎の窓で嗅ぐのを好むようになった。私はただひとりでしみじみと嗅ぐ。そうすると私は遠い遠いところへと運ばれてしまう。私が生まれたよりもっと遠いところへ。そこではまだ可能が可能のままであったところへ。²³⁾」と、可能性としての匂についてしるしている。ブルーストのように、過去が現在をおおいつくしてしまうというよりは、匂を媒介にして、現在が過去にすいこまれてしまうのである。両者とも、偶然に過去と現在とが融合するという点では同一の現象をあつかっているといえよう。

九鬼は偶然性の誕生の音を聞こうとする。

「『ピシャリ』とも『ポックリ』とも『ヒョッコリ』とも『ヒョット』とも聞こえる。『フット』と聞こえる時もある。『不図』^とというのはそこから出たのかも知れない。場合によっては『スルリ』というような声に聞こえることもある。偶然性は驚異をそそる。

thrillというのも『スルリ』と関係があるに違いない。私はかつて偶然性の誕生を『離接肢の一つが現実性へするりと滑ってくる推移のスピード』というようにス音の連続で表してみたこともある。²⁴⁾」

九鬼の偶然性論究は、「驚異」、芸術、あるいは運命との関係を基盤とし、垂直的時間の発見に至る。

『明暗』に戻ってみよう。津田がお延と結婚したのは偶然のなせるわざであり、津田は温泉宿で、清子に偶然廊下で会う。そして、津田を部屋で迎える清子の行動は、「有体に云えば客を迎えるといふより偶然客に出喰わした²⁵⁾」と叙述される。

津田と清子の再会が、一者が他者のうちに、我に対する汝を見出すことにははるかに距離が存在していることは明らかであり、九鬼のいう「独立する二元の邂逅」ではありえまい。

ところで、因果律には、時間というファクターが介入してくる場合がある。因果系列における偶然性とは、結果として然あるべきものがそうはならない場合であろう。そこに驚きの感情が生まれる。

清子が、温泉宿の廊下で津田に会ったときの驚き。ところが、翌朝になって、ことの真相が明らかになると、清子にとっては昨夜の邂逅は驚きでもなんでもなくなっている。ごくあたりまえ

のこの推移にしかすぎなくなってしまう。偶然だと思われたものが、必然的な因果関係の系列の中におさまってしまうのである。

同一の出来事は、見方によっては偶然でもありうるし、また必然的なものであると見ることもできるのか。

漱石は津田をして「[...]解^{わか}らない」と言わせ、思考を中断させている。

清水は、「なぜ、作者は、清子の出会いという極めて重要な場面に、〈突然〉性を与えたのか」という問題提起²⁶⁾をして、その結論として「津田の〈突然〉性が、真の〈突然〉性でないこと、いいかえれば津田による技巧の実践、吉川夫人の示した技巧としての〈天然自然〉の演出にほかならない」としている。

とするならば、作者・漱石の偶然性（「突然」とは「偶然」のある特殊な様態であると考えられるならば）にたいする考えは、ポアンカレの、偶然とは畢竟必然性の複雑の極致であるという理解に近いのであろう。

小説においては、ある種の統一を全体に付与する必要があるがゆえ、自動記述によるものでない限り、因果性が求められるのではないか。

こうみえてくると、『明暗』、九鬼の偶然性探究においては、人間同士の邂逅という問題が重要なテーマとなっていることがわかる。一方、ブルーストの場合においてははどうだろうか。『失われた時を求めて』においては、膨大な数の人物が登場するが、そこには作者の意図として、必ず因果関係の連鎖が長い期間をはさむものの、そうなるべくして人物同士が再会したり、いうならば必然の発展過程が描かれている。

ブルースト自身、『失われた時を求めて』における筋のコンパスは非常に大きく広げられていて、その因果関係を辿ることがむずかしいということを言っている。

ブルーストにおいて問題になるのは、たとえばマドレーヌ菓子の挿話における突然の歓喜の出現のような偶然性についてであろう。

これについて考えてみよう。

ある冬の日、(私)が寒そうにしているのを母親がみて、いつもの習慣にはないことだが、紅茶を少しいただきなさいと言った。

「私は、マドレーヌのかけらが溶けるままに浸しておいた紅茶を、機械的に一匙すくって口に入れた。ところがお菓子のかけらが混じった一匙の紅茶が口蓋に触れた瞬間、総毛立つほどのふるえがはしり、自分のなかで起こっている何か異常な事態に気づいた。いいしれぬ快感が私のからだいっぱいひろがっていたが、それは他のどんなこととも関係のない快感で、原因というようなものは見当たらなかった。[...]私は自分が凡庸で、偶然の産物で、やがて死すべきものとは感じなくなっていた。これほどの力強いよろこびがどこから私に湧いてきたのか。²⁷⁾」

(私)は、この至福感をもう一度体験しようと思って紅茶を飲むが、一向にうまくゆかない。と、突然、思い出がよみがえってきて、今味わった紅茶の味は、コンプレーでの日曜日の朝、レオニー叔母の部屋で飲んだマドレーヌ菓子を浸した紅茶の味だったのだ。その思い出により、一杯の紅茶茶碗から全コンプレーが湧き出してくるのだった。

この至福体験に遭遇することができるか否かはひとえに偶然にかがっていて、そこには必然性はない。

ブルーストは「見出された時」でつぎのように書いている。

「二つの感覚に共通な特質を近づけ、作家はそれらを互いに結合させてその共通の本質を引き

出し、隠喩を用いて時の偶然性を免れさせねばならぬ。²⁸⁾」

二つの感覚に共通な特質を見だし、その本質を取りだすということは、時間の偶然性から解放されるということである。言い方を変えると、隠喩の働きによって偶然性を超克しようとするのだ。

偶然性の問題にかんして、プルーストは『失われた時を求めて』で、エミール・ブートルーの名を引用している。

九鬼もブートルーの『自然法則の偶然性』を講義の題材にし、著作にも引用している。九鬼のブートルー理解は、存在が未来に可能性を秘めた偶然的形式であることを説いているとする。結局、偶然性の哲学は頑迷な凝結を潑刺たる生動へかえすとする。

現実の人生は少なくとも現象面でとらえるならば偶然性に支配されたものであるかも知れない。

『失われた時を求めて』にかんして、セルジュ・ドゥプロフスキーが指摘している²⁹⁾ように、母と息子との関係は、〈私〉にとっては失われた樂園であり、そこでは共通の本質が明らかになり、互いに結合して、時の偶然性から免れることが可能となっている。これが、祖母の部屋と〈私〉の部屋との間のノックの挿話に隠喩化されてあらわれている。

「樂園があるものなら、そこで祖母が千のものななかからでも聞き分けられるように小さく三回この仕切り壁をノックできれば[...]そして、私たち二人にとってはいくら長くても長すぎはしない永遠を祖母とともにいきさせてくれれば、それ以上私が神に望むことはなかった。³⁰⁾」

このように、プルーストの場合、幸福をもたらす契機は偶然性に支配されているものの、隠喩による二元性からの脱却が、偶然性に支配された世界からのがれ幸福への道であるかのようだ。

ところで、現代の科学における偶然論とはいかなるものだろうか。

「偶然とでたらめとは、厳密な研究の場ではあまり見込みのあるテーマではないと思われていた。昔の科学者たちの多くはこの問題を避けて通った。けれども今日このテーマはものごとの本性を理解するうえで中心的な役割を果たしている。³¹⁾」

もとより、現代科学の確率論による偶然性の問題と、哲学における偶然性あるいは文学作品に描かれた偶然のそれらを同一に論じることはできよう筈もないが、人生、自然をより深く理解するうえで、偶然性の多方面からの探究は意義あることのように思われる。

ヘーゲルは「科学の目的は、偶然の範囲を狭めることだ。」と述べた。これに対し、現代の統計学者ディヴィッド・ブラックウェルは、数学のほとんどはカオスであるかもしれず、われわれが実際に数学と呼んでいるのは、パターンとして認識しているそのごく一部にすぎないのではないかとする。³²⁾

ところで、「偶然」をめぐる、自然科学と文学あるいは哲学の関係について、以前、論争があった。昭和10年2月、中河与一が「偶然の手鞠」という文章を発表し、物理学者の石原純がその論を支持、岡邦雄、三枝博音らは反論した。³³⁾

真銅によれば、石原は自然科学においても、どのような法則も絶対的必然的ではないとし、この因果律への疑問は、必然性の否定という媒介を経て「偶然」に結びつく、とする。

ここで、われわれの文脈に戻るならば、昭和10年12月、九鬼が『偶然性の問題』を刊行しているのに思いあたる。

田中は、九鬼の思想に、「ハイデッガーの『形而上学とは何か』の強い感化³⁴⁾」を認めている。また、「九鬼は、想像力によって[...]『被投性』の背後にまわってみようとする³⁵⁾」とのべている。

九鬼自身、「偶然と芸術」という節で、「我国でも最近中河与一氏によって『マルクス主義の必然論に対して、吾々の思考の根拠を偶然性に置かなければ、吾々の文学は枯死するだろう』といふ主張がされている。(略)要するに偶然性が文学の内容および形式の上に有する顕著なる意義は、主として形而上学驚異と、それに伴ふ『哲学的的美』に存してある³⁶⁾」と述べて、当時のマルクス主義的な必然論にたいする反措定としての「偶然」論の提出ともいうべき面が、一見、時代から超越しているとも思える九鬼にもみられる。

九鬼はつぎのように言っている。

「因果性に関する非決定論と決定論との論点は、決定のうちに微小の非決定性を認めるか、非決定のうちに微小の決定性を認めるかに存在する。³⁷⁾」

さらに、ブートルーの仮定する微小の非決定性は人間に計量のできないものであるからして、ブートルーは非決定論にゆかざるを得ないとする。これは、ポアンカレの「我々は絶対的決定論者になってしまった」と鋭く対立する見方であろう。

九鬼はブートルーの偶然論に傾く。九鬼が描く「苦界の女性」にとってこの世の生は「浮かみもやらぬ、流れのうき(浮き、憂き)身」であり、無から有へ、有から無へと生成流転するこの世界の存在は、われわれ人間にとって「糸より細き線じゃもの、つい切れ易く綻びて」という運命の場であると見られる。

このような運命としての生を、自由な主体の創造の場として、自らが意志したかのように受け取り愛する自由な遊戯する心に積極的な意味を九鬼は見いだそうとする。³⁸⁾

このように、無と存在のあいだを行き来する生成流転する個別の存在論理的構造を解明する九鬼の著作には、遊戯する神という表現が頻出する。九鬼は、この遊戯する神に対して、人間も遊戯して応答し返す「行き方」をとろうとする。³⁹⁾

神の偶然の行為に、人間もそのよってきたところを、偶然のなすがままに受け入れ、融通無碍の生き方に理想を見いだすのである。

竹内は日本人における「はかなさ」という心情を論究しているが、つぎのように述べている。

「中世には『おのずから』という言葉に独特の用法があります。『おのずから』というのは、自然に・あたりまえに、という意味が一般的ですが、たとえば『おのずからのことあれば』とか、『自然のことあらば』といった用法では、『万が一のことがあれば』という意味に転用されて使われています。[…]『万が一』という意味と『あたりまえ』という意味とを、ひとつの言葉の中に込めて使う、非常に面白い使い方です。⁴⁰⁾」

「おのずから」という言葉には、「あたりまえ」と「万が一」という相反する2つの意味をこめて使う用法があるということである。これを小論にあてはめてみるならば、「あたりまえ」は、必然性の支配する世界であろう。また、「万が一」というのは、偶然性のそれである。

このように、日本の精神史をかえりみるならば、必然性と偶然性は表裏一体のものとして考えざるを得ないような場面がありうるのだという思考様式があり、九鬼もその流れに属するのかもしれない。

高山のいうように、「すべての出来事は偶然出来たものである。しかし、そのいずれにおいても関数(法則)的に必然的なものである⁴¹⁾」といえるのではないか。この自由の世界は「豊かな可能性の世界であり、また偶然性の世界であり⁴²⁾」、それは九鬼の考える人間世界に通じている。

高山は、また必然性と偶然性が両立しないという思い込みを避けなければならない、と主張する。「偶然的な出来事は常に同時に必然的でもあり、この自由の世界は、同時に関数必然的な世

界であるが、また、それは豊かな可能性の世界であり、また、偶然性の世界である⁴³⁾とし、人間の自由の問題と結びつけている。

想起という問題も、木田が、メルロ＝ポンティを引用して「『私の過去の経験を私の現在の経験のなかで捉えなおす』といったことが可能なのは、『私』が時間だからである。⁴⁴⁾」と述べているが、偶然性を〈不図〉ととらえる九鬼の時間論に通底しているのではないか。

註

- 1) 竹内哲『偶然とは何か—その積極的意味』177頁、2010年、9月、岩波書店。
- 2) 『九鬼周造全集』1980-81年、岩波書店（以下、『九鬼』と略記）第5巻、167頁。
- 3) 池田美紀子「『明暗』〈対話〉する他者」『日本文学における他者』所収、175頁、1994年、新曜社。
- 4) 同書、171頁。
- 5) 『漱石全集』第11巻、8頁。岩波書店、1984年。
- 6) 『漱石全集』第8巻、448頁。『九鬼』第2巻、「偶然性（講演）」337-8頁。
- 7) 『九鬼』第2巻、338頁。
- 8) 『九鬼』第1巻、9頁。
- 9) 『九鬼』第5巻、「偶然性と運命」28-29頁。
- 10) 『九鬼』第1巻、「いきの構造」47頁。
- 11) 『九鬼』第1巻、「日本芸術における『無限』の表現」424頁-425頁。
- 12) 同書、424頁。
- 13) Marcel Proust, *À la Recherche du temps perdu*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade» I - IV, IV, p.451, 1987-1989. (以下、*Recherche*と略記) 訳文は、井上究一郎『ブルースト全集』1984-1989、筑摩書房。鈴木道彦『失われた時を求めて』1996-2001、集英社を参考にさせて頂いた。
- 14) 『九鬼』第1巻、400頁、「時間の観念と東洋における時間の反復」
- 15) 同書、400頁。
- 16) 同書、404頁。
- 17) 同書、404頁-405頁。
- 18) Gaston Bachelard, *Instant poétique et instant métaphysique*, 1939. ガストン・バシュラール『瞬間の直観』掛下栄一郎訳、135-136頁。紀伊國屋書店、1969年。
- 19) 及川馥『原初からの問い』136頁。法政大学出版局、2006年。
- 20) *Recherche*, I, pp.43-44.
- 21) *Recherche*, I, p.44.
- 22) *Recherche*, I, p.46.
- 23) 『九鬼』第5巻、「音と匂」、167頁。
- 24) 同書、167頁。
- 25) 『漱石全集』第8巻、448頁。
- 26) 清水孝純「『明暗』キーワード考—〈突然〉をめぐる」『文学論輯』第30号、1984年、8月、310頁。
- 27) *Recherche*, I, p.44.
- 28) *Recherche*, IV, p.468.
- 29) Serge Doubrovsky, *La place de la madeleine*, Mercure de France, 1974. 『マドレーヌはどこにある—ブルーストの書法と幻想』綾部正伯訳、東海大学出版会、1993年、89頁。
- 30) *Recherche*, II, p.160.
- 31) D. ルエール著 青木葉訳『偶然とカオス』岩波書店、1993年、223頁。
- 32) アイヴァース・ピーターソン著 今野紀雄監訳、高橋佐良人訳『カオスと偶然の数学—ランダムネス、確率、そして複雑性へ—』白揚社、2000年、294頁。

- 33) 真銅正宏『偶然という問題圏—昭和10年前後の自然科学および哲学と文学—』（『日本近代文学』第59集、日本近代文学論、1998年。）
- 34) 田中久文『九鬼周造の世界』所収、「『偶然性の問題』—もう一つの可能性」、ミネルヴァ書房、2002年、198頁、214頁。
- 35) 同書、214頁。
- 36) 『九鬼』第2巻、「偶然性の問題」218頁-220頁。
- 37) 『九鬼』第2巻、「偶然性の問題」107頁。
- 38) 小浜善信『九鬼周造の哲学—漂白の魂—』昭和堂、150頁、2006年。
- 39) 『九鬼』第2巻、「偶然性の論理」357頁、『九鬼』第1巻、「教父哲学期」357頁。
- 40) 竹内整一『「はかなさ」と日本人—「無常」の日本精神史』平凡社、150頁、2007年。
- 41) 高山宏「必然性・偶然性、そして自由—『哲学とはいかなる営みか』に向けて」「哲学」N. 58,13頁., 法政大学出版局、2007年4月。
- 42) 同書、13頁。
- 43) 同書、13頁。
- 44) 木田元『偶然性と運命』157頁、2001年4月、岩波書店。